

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02621

研究課題名(和文) 養護教諭養成での学校看護技術におけるフィジカルアセスメント実践力育成モデルの樹立

研究課題名(英文) Establishing a physical assessment practical ability in school nursing arts for the yogo teacher training program

研究代表者

葛西 敦子 (KASAI, ATSUKO)

弘前大学・教育学部・教授

研究者番号：80185735

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：養護教諭養成では、子供の健康問題に対して確かな養護実践力を修得した養護教諭を養成する責務がある。そのため学校看護技術では、基礎編としてフィジカルアセスメント(バイタルサインを含む)の知識と技術(講義・実習)、応用編として学生が「模擬事例」を活用したフィジカルアセスメントによる観察・判断・養護実践を展開するシミュレーション教育プログラム(講義・実習・演習)を作成した。学校看護学実習において、本教育プログラムを実施・評価し、さらにその教育内容を検討・改善した。それにより、学校看護技術におけるフィジカルアセスメント実践力を育成するための教育モデルを完成させた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

養護教諭は学校に一人もしくは二人配置であり、養成機関を卒業後すぐに傷病や事故の救急処置への養護実践力が求められる。発達段階の児童生徒を対象とする養護教諭を養成において、「子供の身体を観察できる」フィジカルアセスメント教育の充実が必須である。「学校看護技術」の「フィジカルアセスメント」教育モデルが完成することで、今まで各養成機関に任されてきた学校看護技術「フィジカルアセスメント」教育の基盤となる。

研究成果の概要(英文)：The Yogo teacher training program is responsible for training yogo teachers in reliable and practical nursing skills for coping with children's health problems. To achieve this goal, we have created a program for acquiring knowledge on and techniques for physical assessment (including vital signs) via lectures and training for the basic edition on school nursing skills and a simulation education program in which observation, judgment, and yogo practice are deployed by students through physical assessment utilizing simulated cases, via lectures, training, and practice, for the applied edition. We first implemented and evaluated this educational program as part of school nursing training, then examined and improved the content. The result is an educational model for teaching practical physical assessment skills in school nursing techniques.

研究分野：学校看護学

キーワード：フィジカルアセスメント 学校看護技術 養護教諭養成教育 養護教諭 模擬事例

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 養護教諭に求められている資質・能力

学校現場において養護教諭には、医学・看護学の知識技術を有した専門職として、子供の健康問題に的確に対応できる養護実践力の資質・能力が求められている。養護教諭の重要な役割に「救急処置」がある。学校では様々な慢性疾患の子供が学び、アナフィラキシーショックや低血糖症状を発症した時は、子供の身体の状態を観察「フィジカルアセスメント」し、「緊急度・重症度」を判断し、救急処置を実践しなければならない。たとえば、小学6年の女兒が、駅伝の練習中に倒れた。養護教諭は、脈拍は観察せず、死戦期呼吸(心停止直後のしゃくりあげるような呼吸)を「呼吸あり」と判断し、AED・心肺蘇生法を実施することなく、死亡した事例がある。他にも、養護教諭が適切な救急処置を実践できなかった学校事故裁判事例の報告も多数見受けられる。これらのことから、養護教諭には的確な「子供の身体を観察できる」フィジカルアセスメントの実践・判断による救急処置ができ「子供の命」を守る確かな養護実践力が求められる。

(2) 養護教諭養成における科目「看護学」でのフィジカルアセスメント教育の現状と課題

養護教諭養成教育での「養護に関する科目は28単位」であり、「看護学(臨床実習及び救急処置を含む)は10単位」と多くの割合を占め、看護学の知識・技術が養護教諭の基盤となっている。養護教諭養成は、教育学部(教育系)看護学部(看護系)その他の学部(学際系)など多様である。日本養護教諭養成大学協議会の加盟校は137校(令和2年7月現在)あり、教育系28大学、看護系68大学、学際系41大学である。看護師教育の基礎看護学では「フィジカルアセスメントを強化する内容とする」が明記され(平成23年2月厚生労働省)フィジカルアセスメント実践力が育成されている。しかし、教育系・学際系大学の教育内容は、大学教員に任されているのが現状である。養護教諭養成大学教員対象の実態調査では、教育系・学際系大学の教員は看護系に比べ、フィジカルアセスメント教育が十分に行われていない現状が明らかとなった。養護教諭養成教育では、科目「看護学」の中で、子供を対象とした養護教諭の専門性に特化した学校看護技術における「子供の身体を観察でき」フィジカルアセスメント教育を樹立することが課題である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、多様化・複雑化する子供の健康問題に対して確かな養護実践力をもって対応できる養護教諭を養成するために、「学校看護技術」における「フィジカルアセスメント」実践力を育成するための教育モデル樹立することを目指す。

養護教諭養成機関を卒業し、採用された養護教諭たちは、学校現場において卒業後すぐに傷病や事故の救急処置への養護実践力が求められる。そのためには、養護教諭養成機関においては、まずは「子供の身体を観察できる」フィジカルアセスメント技術を修得させなければならない。学校現場での実践を想定し、「模擬事例(子供が身体不調を訴える)」による救急処置において、フィジカルアセスメント技術による身体を観察をし、それに基づいた適切な養護実践を展開できる能力を身につけさせることが可能となる。

3. 研究の方法

(1) フェイズ : 「養護教諭養成教育で教授する「学校看護技術の提案」の中の「フィジカルアセスメント」教育の内容とそれを支える知識・技術の妥当性の検証

計画1 : 養護教諭養成大学の学校看護技術におけるフィジカルアセスメント教育内容の調査

(2) フェイズ : 養護教諭養成で教授する学校看護技術におけるフィジカルアセスメント教育プログラムの立案

計画2 : 養護教諭の救急処置実践事例を基盤とした「模擬事例」の作成

計画3 : フィジカルアセスメント教育プログラムの立案

(3) フェイズ : 立案したフィジカルアセスメント教育プログラムを実践・評価し、養護教諭養成での学校看護技術におけるフィジカルアセスメント実践力を育成する教育モデルの作成

計画4 : 立案した「養護教諭養成で教授する学校看護技術におけるフィジカルアセスメント教育プログラム」の実践と評価

研究メンバーにおいて、(1)(2)(3)の研究結果を分析・検討し、「養護教諭養成での学校看護技術におけるフィジカルアセスメント実践力を育成する教育モデルの樹立を目指す。

4. 研究成果

(1) 養護教諭養成大学における「学校看護技術」の教授項目調査 - 養護教諭養成教育に必要なフィジカルアセスメント項目の検討 -

2018年『養護教諭養成教育で教授する学校看護技術の提案』を発表し、養成教育で教授すべ

き「学校看護技術」の学習項目を提示した。今回の調査目的は、この「学校看護技術」の学習項目の中の「フィジカルアセスメント」に関する項目の妥当性を検証することである。調査対象とした12大学は、日本養護教諭養成大学協議会の会員校であり、かつ15年以上にわたり養護教諭を養成している大学（国公立7校、私立5校）である。そこで「看護学」を担当している教員へ回答を求めた。

調査方法は、「学校看護技術」の学習項目の中の「フィジカルアセスメント」項目に関して、教授している方法を「講義・動画使用・デモンストレーション・実習・演習・臨床実習」で実施しているか、または扱っていないかで回答を求めた。調査期間は、2020年10月～2021年4月であった。フィジカルアセスメントの調査項目は、1.頭頸部4項目 2.顔面3項目 3.眼6項目 4.耳6項目 5.鼻6項目 6.口腔4項目 7.歯3項目 8.皮膚2項目 9.胸部5項目 10.腹部7項目 11.上肢4項目 12.下肢4項目 13.全身8項目 の計62項目であった。

調査の結果、調査の結果、対象大学のすべてが選択したフィジカルアセスメント項目はなかった。12大学中11大学が「講義」をしているのは35項目あり、その中でも「視診」については、歯・上肢・下肢を除いたすべての部位で教授されていた。「実習」では3項目であった。

その他の教授方法については、半数の大学がまたはそれ以下の大学しか行っていない項目が大部分であった。調査したフィジカルアセスメント項目の中には、大学によっては看護学以外の科目で行っている項目があった。対象大学の半数以上が「扱っていない」とした項目は62項目中5項目のみであり、特に耳・鼻・歯といった感覚器の項目が占めていた。

これらのことから、養護教諭養成教育ではフィジカルアセスメントの観察の基本である「視診」が重要であることが推察された。

(2) 養護教諭の救急処置実践事例を基盤とした「模擬事例」の作成

1) テーマ：暑さの中での体調不良を訴える小学校5年生の女子

医療機関での診断は、「熱中症」であった。

2) テーマ：腹痛を訴える高校2年生の女子

医療機関での診断は、「急性虫垂炎（腹膜炎併発）」であった。

3) テーマ：頭痛を訴える小学校2年生の女子

医療機関での診断は、「無菌性髄膜炎（手足口病の不顕性感染後）」であった。

4) テーマ：昼食後に体調不良を訴える小学校2年生の女子

医療機関での診断は、「食物アレルギーによるアナフィラキシーショック」であった。

(3) 養護教諭養成での食物アレルギーの模擬事例を用いたシミュレーション教育

- 模擬患者とシミュレータでの実習前後での学生自己評価得点の比較 -

1) はじめに

近年、医学・看護学教育のみならず、養護教諭養成教育においてもシミュレーション教育が盛んに行われるようになったこの教育活動においては、フィジカルアセスメントが必須となる。シミュレーション教育では、模擬事例を設定し、シナリオを作成する。養護教諭養成教育では、模擬患者を活用する教育方法や、近年では高機能患者シミュレータを用いた教育方法が取り入れられ、多数の研究報告が見受けられるようになった。

様々な健康問題を抱える子供たちが在籍している学校現場において、近年のアレルギー疾患増加に伴い、特に食物アレルギーの児童生徒への対応が注目されている。本研究では、養護教諭が修得しておかなければならない【模擬事例「食物アレルギー」の児童のアレルギー症状発生時の救急処置（対応）】に関するシミュレーション教育の授業を実施した。A大学では模擬患者、B大学では高機能シミュレータの多職種連携ハイブリッドシミュレータ（SCENARIO、京都科学）（以下、シミュレータとする）を活用した。そこで本研究では、事前アンケート（実習前）と事後アンケート（実習・演習後）を実施し、模擬患者とシミュレータでの実習前後での学生自己評価得点を比較し、検討した。今後のシミュレーション教育における模擬患者とシミュレータの活用における教育課題について検討することを目的とする。

2) 研究方法

【模擬事例「食物アレルギー」の児童のアレルギー症状発生時の救急処置（対応）】の授業計画

・既習の学習内容

講義では、(1)フィジカルアセスメント概論（フィジカルアセスメントとは、フィジカルアセスメントの基本技術、フィジカルアセスメントの必要性、一般状態のアセスメント、観察したことの判断、フィジカルアセスメントを実践する上での必要物品、養護教諭にとってフィジカルアセスメントを実践する意義）(2)フィジカルアセスメントの実際（バイタルサイン測定技術：体温、脈拍（体表面から触知できる動脈）呼吸（動脈血酸素飽和度（SpO₂）

を含む) 血圧、意識レベルについて学んだ。実習では、(1) バイタルサイン測定の技術、(2) 呼吸音、心音、腸蠕動音の聴診、(3) フィジカルアセスメントの実際(全身状態(バイタルサイン)、皮膚の観察、粘膜の観察、消化器の観察(腹膜刺激症状含む)、呼吸器の観察など)として、教員がデモンストレーションを実施し、その後に学生がそれぞれのフィジカルアセスメントを体験した。

・ 授業(講義・実習・演習)の内容(表1)

表1 【模擬事例「食物アレルギー」の子どものアレルギー症状発生時の救急処置(対応)】の授業計画

実習	1コマ (90分)	授業(講義・実習・演習)の内容
1週目	1コマ目 10分休憩 2コマ目	1. 講義:「食物アレルギー」とアレルギー症状発生時の対応(エピペン注射含む)(パワーポイントを使用して説明する) 2. 講義:食物アレルギー緊急時症状チェックシート 3. 講義:模擬事例「昼食後に体調不良を訴える小学校2年生の女子」への実習に関連する資料の配付・説明 資料1:ブリーフィング(事例説明) 資料2:個別の事前学習シート(演習・実習前) 次回実習までの課題:各自が資料1を読んで、事前学習し、まとめてくる
2週目	1コマ目 10分休憩 2コマ目	A 大学では4グループ、B 大学では5グループに分かれ、演習・実習・演習を展開した 4. 演習:模擬事例「昼食後に体調不良を訴える小学校2年生の女子」への救急処置(対応) 資料3:グループワークシート(実習前の演習)(作戦会議)(45分) 5. 模擬事例への救急処置(対応)の実践(事前アンケート:実習前) 6. 実習:模擬事例「昼食後に体調不良を訴える小学校2年生の女子」の身体状況(フィジカルアセスメント)の観察とその判断に基づいた救急処置(対応)の実践(制限時間10分間) 7. 演習 各グループ実践のまとめ 資料4:デブリーフィング(振り返り)シート(実習後) 8. 演習:各グループの報告と意見交換 9. 模擬事例への救急処置(対応)の実践(事後アンケート:実習・演習後)

資料1 ブリーフィング(事例説明)

<p>テーマ:昼食後に体調不良を訴える小学校2年生の女子</p> <p>ここは、小学校です。養護教諭は、一人配置です。 現在12:40です。保健室には他の児童や教員はいません。 2年生女子の鈴木花子さんが「具合が悪い」と訴えて、一人で保健室へ来ました。顔色不良、呼吸が速く、ゼーゼーする呼吸。 鈴木さんは「かゆい」と首のあたりを掻いている。皮膚に蕁麻疹あり、赤くなっている。眼瞼周囲・口唇の腫脹が見られる。「お腹が痛い」と言う。 「鈴木さんは、カニのアレルギーあるよね。みんなの今日の給食は「シーフードカレー」だったけど、食べたりしなかった?」と聞くと、鈴木さんは黙っている。</p>

3) 調査期間・調査対象

2023年5月から6月、2大学の養護教諭養成課程3年次学生A大学19名、B大学27名を対象に、模擬事例「昼食後に体調不良を訴える小学校2年生の女子」への養護実践を展開するための授業(講義・実習・演習)を行った実習では、A大学では模擬患者、B大学ではシミュレータを活用した。

4) 調査方法・調査内容・分析方法

A大学では4グループ、B大学では5グループに分かれ、実習と演習を展開した。調査は、表1の中で示したように、事前アンケート(実習前)と事後アンケート(実習・演習後)を実施した。調査内容は、11項目であり、各項目の実践について自己評価として、リカート尺度の4段階尺度を用い、「4. できる」「3. まあまあできる」「2. あまりできない」「1. できない」から回答してもらい、それぞれ4点から1点を配点した。本調査はGoogle Formsを用いて調査した。A大学(模擬患者)学生とB大学(シミュレータ)学生の事前アンケート結果と事後アンケート結果の各項目の得点を対応のないt検定で比較した。

5) 結果

A大学(模擬患者)とB大学(シミュレータ)の事前・事後アンケートにおける救急処置活動に関する自己評価の平均得点の比較(表2)

表2 A大学(模擬患者)とB大学(シミュレータ活用)の事前・事後アンケートにおける救急処置活動に関する自己評価の平均得点の比較

質問項目	平均得点 (SD)					
	事前アンケート:実習前			事後アンケート:実習・演習後		
	A大学 (19名)	B大学 (27名)	p値	A大学 模擬患者 (19名)	B大学 シミュレータ (27名)	p値
必要な観察事項の列挙	3.1(0.23)	2.8(0.58)	.032*	3.1(0.74)	3.5(0.51)	.043*
必要な問診の実践	2.7(0.48)	2.6(0.64)	.580	2.8(0.63)	3.2(0.51)	.018*
必要な視診の実践	2.8(0.60)	2.5(0.64)	.089	2.8(0.77)	3.3(0.56)	.023*
必要な触診の実践	2.5(0.51)	2.0(0.52)	.003**	2.6(0.84)	2.6(0.57)	.820
必要な聴診の実践	2.4(0.50)	2.2(0.64)	.388	2.4(0.76)	2.7(0.72)	.142
必要なバイタルサイン観察の実践	3.1(0.41)	2.7(0.61)	.024*	2.8(0.54)	3.5(0.58)	.000***
身体情報の判断(アセスメント)	2.8(0.42)	2.5(0.58)	.073	2.9(0.74)	3.3(0.59)	.083
適切な救急処置の実施	2.6(0.51)	2.3(0.61)	.094	2.6(0.69)	3.2(0.53)	.005**
管理職や担任教師等との連携	2.7(0.56)	2.4(0.75)	.138	2.8(0.83)	3.3(0.53)	.064
保護者への説明	2.6(0.50)	2.6(0.75)	.833	3.0(0.47)	3.3(0.62)	.044*
救急隊への説明	2.8(0.42)	2.5(0.75)	.127	3.2(0.60)	3.3(0.66)	.590

t検定 *: <.05, **: <.01, ***: <.001

A大学(模擬患者)とB大学(シミュレータ)の事前・事後アンケートの差である自己評価の平均成長得点の比較(表3)

表3 A大学(模擬患者)とB大学(シミュレータ活用)の事前・事後アンケートの差である自己評価の平均成長得点の比較

質問項目	平均成長得点 (SD)		
	A大学 模擬患者 (19名)	B大学 シミュレータ (27名)	p値
必要な観察事項の列挙	0.1(0.71)	0.7(0.59)	.001**
必要な問診の実践	0.1(0.81)	0.6(0.57)	.021*
必要な視診の実践	0.0(0.75)	0.8(0.68)	.001**
必要な触診の実践	0.1(0.71)	0.6(0.57)	.009**
必要な聴診の実践	0.0(0.82)	0.5(0.85)	.060†
必要なバイタルサイン観察の実践	-0.3(0.56)	0.8(0.70)	.000***
身体情報の判断(アセスメント)	0.1(0.74)	0.7(0.59)	.004**
適切な救急処置の実施	0.0(0.82)	0.9(0.66)	.001**
管理職や担任教師等との連携	0.1(0.74)	0.8(0.79)	.003**
保護者への説明	0.4(0.60)	0.7(0.86)	.090
救急隊への説明	0.4(0.68)	0.7(0.86)	.110

t検定 †: <.1, *: <.05, **: <.01, ***: <.001

6) まとめ

A大学では模擬患者、B大学ではシミュレータを活用し、養護教諭として模擬事例「昼食後に体調不良を訴える小学校2年生の女子」についての救急処置活動を展開してもらった。模擬患者を活用した学生の自己評価(成長得点)は、シミュレータを活用した学生の自己評価(成長得点)より、有意に低かった。模擬患者を活用した学生は、模擬患者の訴えに対して、問診・フィジカルアセスメントを実践し、瞬時に正常・異常の判断をし養護実践しなければならない。学生の自己評価得点をみると、シミュレータを活用した方が教育効果が高いものと判断される。しかし、模擬患者でなければ学べないこと、シミュレータでなければ学べないことがある。両者のメリット・デメリットを理解し、フィジカルアセスメント教育方法を実践する必要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 葛西敦子・山田玲子・福田博美・佐藤伸子	4. 巻 第131号
2. 論文標題 養護教諭養成での食物アレルギーの模擬事例を用いたシミュレーション教育 - 模擬患者とシミュレータでの実習前後での学生自己評価得点の比較 -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 弘前大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 155-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 葛西敦子・山田玲子・福田博美・佐藤伸子	4. 巻 第131号
2. 論文標題 養護教諭養成課程卒業前学生のバイタルサインにおける観察技術、正常・異常の判断、養護実践に関する自信の程度	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 弘前大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 147-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 福田博美・藤井紀子・小川真由子・古村奈保子・佐藤伸子・山田玲子・葛西敦子	4. 巻 第131号
2. 論文標題 養護教諭を対象とした高機能シミュレータを活用したICT教育 危機管理マニュアルを用いた熱中症の対応の検討	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 弘前大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 167-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山田玲子・葛西敦子・佐藤伸子・福田博美・岡田忠雄	4. 巻 第74巻第2号
2. 論文標題 養護教諭養成課程学生へのフィジカルアセスメントの観察技術と判断に関する教育方法の検討	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 北海道教育大学紀要（教育臨床研究編）	6. 最初と最後の頁 197-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山中結加・森愛未・河合咲良・早川実希・福田博美・小川真由子・山田玲子・葛西敦子・佐藤伸子	4. 巻 第73輯（教育科学編）
2. 論文標題 学校における非接触体温計の正しい使用方法の普及 動画説明資料の検討	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 愛知教育大学研究報告	6. 最初と最後の頁 29-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山田玲子、岡田忠雄、葛西敦子、佐藤伸子、福田博美	4. 巻 81
2. 論文標題 養護実践における学校救急処置でのバイタルサイン観察に関する研究（第2報）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 小児保健研究	6. 最初と最後の頁 85～93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 福田博美、小川真由子、藤井紀子、佐藤伸子、山田玲子、葛西敦子	4. 巻 第71輯
2. 論文標題 COVID-19の流行による学校のバイタルサインの測定器具の変化 パルスオキシメータおよび非接触体温計の所持状況	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛知教育大学研究報告	6. 最初と最後の頁 26-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 葛西敦子・山田玲子・福田博美・佐藤伸子
2. 発表標題 養護教諭養成課程学生の食物アレルギーの模擬事例を用いたフィジカルアセスメント教育の検討
3. 学会等名 日本学校保健学会第69回学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 葛西敦子・山田玲子・福田博美・佐藤伸子
2. 発表標題 養護教諭養成課程卒業前学生のバイタルサインに対する観察技術、正常・異常の判断、養護実践に関する自信の程度
3. 学会等名 日本学校保健学会第69回学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山田玲子・葛西敦子・佐藤伸子・福田博美・岡田忠雄
2. 発表標題 養護教諭養成課程学生への事例を用いたフィジカルアセスメント教育の現状と課題
3. 学会等名 日本学校保健学会第69回学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山中咲良・森愛未・河合咲良・早川実希・福田博美・小川真由子・山田玲子・葛西敦子・佐藤伸子
2. 発表標題 非接触体温計の正しい使用方法の普及
3. 学会等名 第66回東海学校保健学会学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 葛西敦子・山田玲子・福田博美・佐藤伸子
2. 発表標題 養護教諭養成課程卒業前学生のバイタルサイン観察技術の自信と影響を受けた実習に関する研究 - 「養護教諭を志望する」学生と「養護教諭を志望しない」学生との比較 -
3. 学会等名 第70回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 佐藤伸子・清末紗衣・田中友花・福田博美・山田玲子・葛西敦子
2. 発表標題 学校の保健室における非接触体温計の活用について
3. 学会等名 第70回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山田玲子・葛西敦子・佐藤伸子・福田博美・岡田忠雄
2. 発表標題 養護教諭養成課程学生へのフィジカルアセスメントの観察技術と判断に関する教育方法の検討
3. 学会等名 日本学校保健学会第68回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山中結加・河合咲良・福田博美・小川真由子・山田玲子・葛西敦子・佐藤伸子
2. 発表標題 非接触体温計での体温測定の利用 - 発汗による影響の検討 -
3. 学会等名 第65回東海学校保健学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森愛未・福田博美・小川真由子・山田玲子・葛西敦子・佐藤伸子
2. 発表標題 非接触体温計での体温測定の利用 - 性差による影響と順応速度の検討 -
3. 学会等名 第65回東海学校保健学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐藤伸子・田上七海・大野結貴・福田博美・目黒亜香音・朝原万尋・小川真由子・山田玲子・葛西敦子
2. 発表標題 学校における手首式血圧計の活用に関する検討
3. 学会等名 第69回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 葛西敦子、山田玲子、佐藤伸子、福田博美
2. 発表標題 養護教諭養成大学における「学校看護技術」の教授項目調査（2） 養護教諭養成教育に必要なフィジカルアセスメント項目の検討 -
3. 学会等名 日本学校保健学会第67回学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田玲子、葛西敦子、佐藤伸子、福田博美
2. 発表標題 養護教諭養成大学における「学校看護技術」の教授項目調査（1） 養護教諭養成教育に必要な看護技術項目の検討 -
3. 学会等名 日本学校保健学会第67回学術集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	佐藤 伸子 (SATO Nobuko) (10226946)	熊本大学・大学院教育学研究科・講師 (17401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山田 玲子 (YAMADA Reiko) (10322869)	北海道教育大学・教育学部・教授 (10102)	
研究分担者	福田 博美 (FUKUDA Hiromi) (90299644)	愛知教育大学・教育学部・教授 (13902)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関